

# 平 行 处 理 再 考

館 清 隆



# 平行処理再考

館 清 隆

(1992年10月19日受理)

## 1. はじめに

本稿の目的は too と also の意味的振る舞いを説明するためにレレバンス理論によって提案された平行処理(parallelism in processing)と呼ばれる概念と、同じく too と also の意味的振る舞いを説明するために館(近刊)で提案した拡張的焦点(expanding focus)に関する意味的条件を比較し、どちらがこの問題に対してより妥当な説明を与えることができるかを検討することである。

## 2. 平行処理

この節では、レレバンス理論が too と also に対して提案する平行処理(parallelism in processing)について第3節での議論に必要な範囲でその概略を示すことにする。Blass(1990, 136-160)は too や also に観察される平行処理の下位区分として(1)を仮定している。<sup>1</sup>

- (1) a. 平行確証(parallel confirmation)
- b. 平行反証(parallel disconfirmation)
- c. 平行前提(parallel premise)

この3種類の平行処理の例であると Blass が論ずるものを、次に順に検討することにする。also を含む(2)は平行確証の例として Blass(*op.cit.*, 138)が指摘するものである。

- (2) Klaus has five cars and also a yacht.<sup>2</sup>

例(2)の and に先行する第一被接続要素は、(3a)のような仮定が成立している環境で発せられれば、(3,b)の含意を持つことになる。また、and に後続する第二被接続要素もまた(4)のような仮定が成立している環境で発せられれば、同じ(3b)の含意を持つことになる。このように、平行確証においては、最初の節から引き出されている含意(ここではクラウドが金持ちであること)に対す

る証拠を第二番目の文が追加することになる。あるいは、問題の含意を強化することになる。そして also の機能はこの平行確証を保証することであると論じている。

- (3) a. People who own five cars are rich.  
b. Klaus is rich.
- (4) People who own yachts are rich.

次の(5)は平行処理の第二番目の下位類である平行反証の例として Blass(*op.cit.*, 139)が挙げるものである。

- (5) A : Klaus is rich, he plays tennis.  
B : I'm not rich and I also play tennis.<sup>3</sup>

A と B の二人によるこの連続する談話において、まず話し手 A が(6)のような仮定を立ててテニスをするクラスは金持ちである、と主張している。

- (6) People who play tennis are rich.

(5)ではその後、話し手 A が拠り所とした仮定(6)に話し手 B が異議を唱えると同時に、クラスが金持ちであるという主張にも反対する発言を also を用いた文で行なっている。ここでの also の役割もまた平行処理である、つまり also は第二被接続要素が平行的に処理されることを聞き手に促すと論じている。先の例(2)との違いは、(2)が確証(confirmation)であったのに対し、(5)の例は反証(disconfirmation)となっている点であるが、この違いは also に起因するものでないと Blass は論じている。

平行処理に関する最後の類として Blass(*op.cit.*, 144)が提案しているのは、平行前提(parallel premise)である。

- (7) a. Bill didn't come for lunch today.  
b. He has a cold.  
c. Also, he doesn't like fish.

also を含む例(7c)は(7b)から得られる帰結つまり(7a)を引き出す前提を追加する。ここでの also の機能は、同じ帰結をもたらす前提として当該の文が平行的に処理されることを聞き手に促すことになる。

Blass (*op.cit.*, 155-6) はさらに逆向確証 (backwards confirmation) と逆向否定 (backwards contradiction) の例としてそれぞれ (8), (9) のような too を含んだ談話を挙げている。談話 (8) では話し手 B は話し手 A の発言を「そのとおりなんですよ」と確証しているのに対して、談話 (9) では話し手 B は話し手 A の発言を「そんなことないですよ」と否定している。また、Blass は too には平行処理以外にこのような機能があるが、一方 also はこれらの逆向的機能を欠くと議論している。

(8) A : Susan is a nice person.

B : She is too.

(9) A : Susan is not a nice person.

B : She is too.

本論ではこの逆行確証と逆行否定については、次のような点で too の用法としては特殊であると考え、考察の対象としないことにする。まずこれらの too が一般的な too の用法ではないことに注意を払うべきであり、Blass (*op.cit.*, 155) 自身も (9) は方言的色彩が強いと判断しているようである。<sup>4</sup> さらに、このような too は次節で論ずる文の焦点の問題とは無関係に用いられているものであり、平行処理の例として Blass が取り挙げた例、あるいは、次節で焦点との関わりで論ずる too とは別の語彙項目であると見なすのが妥当であると思われる。

### 3. 拡張的 (expanding) 焦点に対する条件

次に too と also の振る舞いに関するもう 1 つの代案として館 (近刊) の議論についてここで簡単にその概略を示すことにする。そこでは too と also は文の焦点と結びつく副詞であると仮定し、同時に Dik, *et al.* (1981) による焦点の機能に関する分類 (i-vi) を採用した。当然のことながら、too と also は拡張的焦点 (iii) と結び付く副詞であると仮定することになる。なお、以下の例ではイタリック体で文の焦点を示すことにする。

(i) 補完的 (completive) 焦点：聞き手の情報の欠如を補う。

A : What did you buy ?

B : I bought *coffee*.

(ii) 選択的 (selective) 焦点：選択肢の中からの選択

A : Did you buy tea or *coffee* ?

B : I bought *coffee*.

(iii) 拡張的 (expanding) 焦点：項目の追加

A : He bought *coffee*.

B : But he also bought *rice*.

(iv) 制限的(restrictive)焦点 : 項目の制限

A : Did he buy coffee and rice ?

B : No, he only bought *rice*.

(v) 置換的(replacing)焦点 : 項目の置き換え

A : John went to New York.

B : No, he went to *London*.

(vi) 並列的(parallel)焦点 : 対になった項目の列挙

A : Who bought what ?

B : *Tom* bought *a car* and *John* *a bike*.

さらに、焦点に関する一般的議論のために(1)単一文中に複数個の焦点が生ずることが可能である、(2)一つの焦点が(i)-(vi)の機能のうちの二つ以上を果たすことが可能であるの二点が指摘された。

too や also の統語的環境としては、(10)-(12)のように特定の拡張的焦点として機能する構成素に隣接して生じている場合と、(13)-(15)のように文頭、助動詞、文末の位置に生じ、拡張的焦点として機能する構成素はこれらの副詞とは離れた位置に生ずる場合がある。このような統語的振る舞いは、次のように一般化できることを示した。すなわち、too は構成素の右側に付加されその構成素の範囲内で左側に作用域(scope)を広げるのに対し、also は構成素の右側と左側に付加され、その構成素の範囲内でどちら向きにも作用域を広げることができる。

(10) A : John is writing a paper.

B : But \*too/(?)also *Tom* is writing a paper.

B : But *Tom* too/also is writing a paper.

(11) A : John is writing a paper.

B : He is writing \*too/? also *a book*.

B : He is writing *a book* too/(?)also.

(12) A : John is fixing the fence.

B : He is \*too/also *painting* it.<sup>5</sup>

B : He is *painting* \*too/\*also it.

(13) A : John has written a paper.

B : \*Too/(?)Also *Tom* has written a paper.

B : \*Too/(?)Also John has *posted* it.

B : \*Too/(?)Also Tom has written *a book*.

- (14) A : John has written a paper.  
 B : *Tom* has \*too/also written a paper.  
 B : John \*too/also has *posted* it.  
 B : John \*too/also has written *a book*.  
 (15) A : John has written a paper.  
 B : *Tom* has written a paper too/(?) also.  
 B : John has *posted* it too/(?) also.  
 B : John has written *a book* too/(?) also.

また、拡張的焦点とそれに対する前提が、その他の種類の焦点及び対応する前提とどのように異なるかを論じ、too や also が結び付いた拡張的焦点に対して、次の(16)のような意味的条件を提案した。

(16) 拡張的焦点に関する条件

補完的焦点の後ろに too や also の結びついた拡張的焦点が続く場合には、補完的焦点が二つ併記される場合に比べて、二つの焦点は概念的により制限された同一の類に属さなければならない。

生徒の好きな食べ物と好きな教科の相関に関心を持った教師 A の質問に生徒の一人が答える場合に、条件(16)は too や also の使用が不適切であることを正しく予測してくれる。

- (17) A : Which subject and what food do you like ?  
 B : I like *math* and *fruits*.  
 B : ?? I like *math* and *fruits* too.  
 B : ?? I like *math* and also *fruits*.

また、条件(16)は(17)のように文中の特定の構成素が拡張的焦点として機能する時にのみ有効なのではなく、焦点の幅(range)が文全体に及ぶ場合にも、同じように正しい予測をしてくれることが示された。

- (18) A : Why didn't you come ?  
 B : I had a cold and \*too/(?) also *the roads were flooded*.  
 B : I had a cold and *the roads were* \*too/also *flooded*.  
 B : I had a cold and *the roads were flooded* too/(?) also.

例えば、(18)のBの発話において第二被接続要素は文であり、焦点の幅はその文全体に及んでいる。(18)のBの発話が容認可能なのは、第一接続要素も第二接続要素も話し手Bが来なかった理由を述べているからである。同じように、次の(19)が可能となるには、接続詞 *and* の前後の文が共に例えばある町が暴風雨により深刻な被害を受けたことの証拠として解釈されなければならない。

- (19) a. The houses were destroyed, and *\*too/(?) also the roads were flooded.*  
 b. The houses were destroyed, and *the roads were \*too/also flooded.*  
 c. The houses were destroyed, and *the roads were flooded too/(?) also.*

ところが、(20)のように独立した別個の状況をその事実で特定の解釈を与えないまま羅列していたり、(21)のように *and* に先行する部分とそれに後続する部分が原因と結果という別の役割を演じている場合には、先の条件(16)に抵触することになる。

- (20) A: What was going on?  
 B: *\*Tom was reading the newspaper and (also) Jane was (also) washing the dishes (too/also).*  
 (21) A: What happened?  
 B: *\*The teacher came into the room and (also) everyone (also) stopped talking (too/also).*

以上が、館(近刊)の論点である。

#### 4. 2つの代案の比較

ここでは先の節でその概略を説明した2つの提案のうちのどちらが、*too* や *also* を含む文の解釈に対してより妥当性の高い説明となるかを検討することにする。なおこの比較をするにあたって、焦点の幅(*range*)に着目し、文全体が焦点である場合と文の特定の構成素が焦点である場合に分けて議論することにする。

焦点の幅が文全体に及んでいる場合には、2つの提案はかなり似通った主張をする部分があることを、まず指摘しておきたい。上で論じた(18)、(19)を再び(22)、(23)として引用するならば、制約(16)が要求することと、レレバンス理論の平行前提や平行確証などの概念とは、ほぼ同様の主張をしていると解釈することができる。制約(16)の要求をここで繰り返すことは避けるとして、レレバンス理論は(22)を平行前提の例であるとし、(23)を平行確証の例と論ずるであろう。制約(16)もレレバンス理論のこのような主張も、(22)と(23)を次のように解釈することに基礎を置いている。(22)では来る

ことができなかった理由が *and* の前後で述べてあり、(23)では町の被害の程度が深刻であることの証拠が *and* の前後で述べてあるという解釈である。文全体が *too* や *also* が結び付いた拡張的焦点である場合には、このように、制約(16)と平行前提や平行確証は同様の予測をしているように思われる。

- (22) A : Why didn't you come ?  
 B : I had a cold and *\*too/(?)also the roads were flooded.*  
 B : I had a cold and *the roads were \*too/also flooded.*  
 B : I had a cold and *the roads were flooded too/(?)also.*
- (23) a. The houses were destroyed, and *\*too/(?)also the roads were flooded.*  
 b. The houses were destroyed, and *the roads were \*too/also flooded.*  
 c. The houses were destroyed, and *the roads were flooded too/(?)also.*

次に、平行反証の例として Blass が論じていた (24=5) に目を向けることにする。

- (24) A : Klaus is rich, he plays tennis.  
 B : I'm not rich and I (also) play tennis (too).

Blass によれば、ここでの *also* や *too* の役割もまた平行処理であることになる。つまり *too* や *also* は平行確証の場合と同じように平行処理を聞き手に促すが、平行確証の場合とは異なり、反証がもたらされると主張する。具体的に言えば、テニスをしていても金持ちだとは言えないし、クラスも金持ちだとは限らないという解釈がなされる。一方、制約(16)はこの例に対して次のような分析を提案することになる。(26)において *too* と *also* は拡張的焦点として機能する主語名詞句 “I” に結び付いている、したがって、“he” と “I” とは概念的により制限された同一の類に属さなければならない。ここで、「概念的により制限された同一の類」とは何を指すのかを十分に明確にするのは難しいが、単に人間であるだけでなく例えば友人どうしとか言うことであろう。この例に関しては二つの理論はずいぶん異なった主張をすることになる。

Blass が平行反証と呼ぶ機能を *too* や *also* が持つという主張は維持できないことを、次に示してみたい。まず最初に指摘したいことは、平行確証と同じ平行処理がどのような意味で平行反証に主張できるのか、私には不明である。換言すれば、平行反証の際にどのような平行処理が行われたのか、私には理解できないのである。次に、(24)のような例で Blass の言う平行反証のような含意が生ずるのは、*too* や *also* にその責任があるのではなく、問題の文に先行する *I am not rich* と *I play tennis* の相乗効果であり、*too* や *also* は単に拡張的焦点と結び付き、(16)が主張するような機能を持つだけであると思われる。もし *too* や *also* に本質的な機能として平行反証があるのなら

らば, I am not rich のような先行文がなくても, 平行反証が成立するはずであるが, 次の例にそのような解釈を期待することは, 不可能のように思われる。

- (25) A : Klaus is rich, he plays tennis.  
B : I (also) play tennis (too).

too や also が拡張的焦点として機能する特定の構成素と結び付いた例について検討し, 平行反証を too や also に仮定することに反論を試みたわけであるが, 同じように文の特定の構成素と too や also が結び付く場合には, 平行確証にも同様の問題があることを次に指摘したい。Blass が平行確証の例として議論した(2)をここで再度(26)として引用することにする。

- (26) Klaus has five cars and (also) a yacht (too).

レレバンス理論の提案する平行確証の議論に従えば, (26)の too や also はクラウドが金持ちであるという主張を強化する機能を持つことになる。一方, 制約(16)はここでは構成素 a yacht が拡張的焦点であり, five cars と a yacht は単なる人間の持ち物と呼べる以上により制限されたある集合に属さなければならないことを要求する。平行確証という概念は and に後続する部分がクラウドが金持ちであるという主張を強化する含意を持つことが, too や also がもたらす必然であると考えられるのに対して, 制約(16)はそれはいわば偶然であると主張することになる。

文全体に拡張的焦点の幅が及んでいる場合だけでなく, 文の特定の構成素にのみ拡張的焦点の幅が広がり, その拡張的焦点と too や also が結び付いた場合にまで, 平行確証のような含意を too や also の機能として期待することは行き過ぎであることを, 例を用いて示すことは, 容易である。既に本論の中で拡張的焦点の例として取りあげた (27=iii) には, 平行反証や平行前提の含意が見あたらないどころか, 平行確証の含意も見あたらないように思われる。

- (27) A : He bought coffee.  
B : But he also bought rice.

同じような例を追加するのは容易である。

- (28) a. John fixed the fence and he (also) painted it (too).  
b. John did it quietly and (also) elegantly (too).

最後に, 平行前提の例として Blass が論じている例(29)について検討する。例(29)が平行前提と呼

ばれるのは、(29b)に加えて(29c)もビルが昼食を食べに来れなかったことの前提として機能しているからである。

- (29) a. Bill didn't come for lunch today.  
b. He has a cold.  
c. Also, he doesn't like fish.

この例については不明なことが一つある。Blass(*op.cit.*, 144)は moreover と同義の also と断って平行前提の議論を始めている。また、東森(1992)は also が文頭に置かれた場合にのみこの機能を想定した上で、次のような例を指摘し、also だけでなく too にも平行前提の機能があると述べている。<sup>6</sup>

- (30) ... a new person may bring in fresh ideas, improved skills, or new abilities. Then, too, a newcomer will probably start at a lower salary for he will have no seniority.

二人はともに文頭に too や also が置かれた場合だけを念頭に置いているようである。too や also が文頭にあることは、平行前提という概念になにか必然的関連があるのであろうか。Blass と東森はいずれも平行前提を「同じ結論を引き出すための前提の追加」と把握している。このことを文字通りに受け取るならば、(31)も平行前提の例と呼べるはずである。

- (31) a. Bill didn't come for lunch today.  
b. He has a fever.  
c. He (also) has a headache (too).

(31)に見られるような also や too を平行処理と結び付けることが適切でないという議論は、(26)に対して(27)-(28)を用いて行なった議論を繰り返すことにしかならないので差し控える。

ところで、(29c)のような文頭に置かれた also の分析には、次のような二つの代案が可能である。一つの代案は本論で論じた他の also と同じように、これもまた拡張的焦点と結び付く副詞と考えることになる。(29c)では述部の doesn't like fish が拡張的焦点となる。もう一つの代案は、いわば接続詞としての also を認める方法であり、その案では拡張的焦点を後続する文中に認めることはなくなる。このどちらの代案を選ぶかの選択は、本論での平行前提に関する反論に直接の影響を与えるとは思われない。

## 5. まとめ

本論では、レレバンス理論の提案する平行処理の概念と館(近刊)の too や also が結び付いた拡張的焦点に関する条件を比較し、次の三点を明らかにした。特定の構成素が焦点である場合に一貫して平行処理を要求するのは不可能である。平行処理が成立しない場合でも、館(近刊)の提案する条件は成立する。文全体が拡張的焦点として機能する場合には、二つの提案はほぼ同じ予測をする。以上のことから、一つの一般的原則でより多くの例を処理できる意味的条件(16)は、より高い妥当性を持つことが示されたことになる。

## 注

1. ただし、Blass(1990, 144)は(c)の平行前提は平行確証の標準的な例(a standard case of parallel confirmation)とも述べているので、これらの概念は排他的な下位類であるわけではないことになる。また、この分類は英語に関してのみ妥当なものであり、too や also に対応する他の言語の語彙にはこれ以外の平行処理機能(例えば一つの質問に対する平行的回答(parallel answers))が可能である、と論じられている。
2. also の代わりに too を用いることも可能(Klaus has five cars and a yacht too)。
3. also の代わりに too を用いることも可能(I'm not rich and I play tennis too)。
4. 私がこれら2つの談話について容認可能性の判断を求めたアメリカ人母国語話者は、Blass とは逆に、(9)は自然だが(8)は方言的感じが強いと指摘している。
5. 主動詞と後続する目的語の間に too や also の生じた例の文法性は、この位置に要素が侵入するのを阻止する一般的制約が存在するために、低くなる。
6. どの様にして(30)が追加的前提になるのかの説明は、東森(1992)には見あたらない。また、文頭に too があることは事実として、はたして平行前提の例として適切なものであるのか、引用されている部分からは私には判断できない。

## 参考文献

- Blass, R. (1990) *Relevance Relations in Discourse*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Chomsky, N. (1971) "Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretations," in D. Steinberg and L. Jakobovits, eds., *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics, and Psychology*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Culicover, P. W. and M. Rochemont (1983) "Stress and Focus in English," *Language* 59, 123-165.
- Dik, S., et al. (1981) "On the Typology of Focus Phenomena," in T. Hoekstra, et al. eds.,

*Perspectives on Functional Grammar*, 41-74, Foris, Dordrecht.

Green, G. M. (1968) "On *too* and *either*, and not just *too* and *either*, either," *CLS* 4, 22-39

東森勲(1992)「Too と Also の認知的メカニズム」 英語青年 138, 23.

Kaplan, J. (1984) "Obligatory *too* in English," *Language* 60, 510-518.

Ross, J. R. and W. E. Cooper (1979) "*Like* Syntax," in W. E. Cooper and E. G. T. Walker, eds., *Sentence Processing*, Lawrence Erlbaum, New Jersey.

館清隆(近刊)「焦点と結び付く二つの副詞 *too* と *also*」『中部英文学』12.





